

◇被害急増の背景

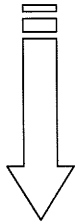
☆ これまで

1 森林開発

- ・ 食料の確保（農地の拡大）
- ・ 燃料、建築材の確保（森林の伐採）
- ・ 生活空間（住宅、道路）の確保
- ・ 水の確保（ダムの建設）

2 狩猟圧

- ・ 国策による狩猟の推進。
- ・ 狩猟規制がなかった。



◎ 野生動物が奥山へ追い払われ、里に出にくい環境であった。

★ 現状

1 人のプレッシャーの減少

- ・ 過疎化、高齢化により里山に人がいなくなった。

2 里山の荒廃

- ・ 炭焼きなどが衰退し里山に入らなくなった。
- ・ 間伐などによる里山の手入れを行わなくなった。

3 狩猟者の減少

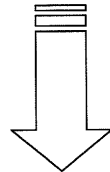
- ・ 時代背景的等から狩猟への依存が減少し後継者が不足してきている。
- ・ 高齢化により、山へ入らなくなってきている。

4 人慣れ（人を見る機会が多くなった。）

- ・ 近くにいっても、人が追い払ったり、撃ったりしなくなった。
- ・ 山菜採りや林道の整備、四駆の登場により人が奥山まで簡単に入っている。

5 安定した生息環境の提供（餌場の提供）

- ・ 柿の実を収穫せず放置している。
- ・ 山に林檎を投棄している。



★野生動物の警戒心がなくなり、里に出やすい環境になった。

◇ 対策

◇ 対策

1 正しい知識の習得

- ① 動物の生態的特性を正しく学習し、それにあった防除の仕方を確立する。
- ② 人的被害を軽減するために、動物の生態的特性を積極的に啓発する。
- ③ 動物が人慣れしないための教育を、子供が小さいうちから教育する。

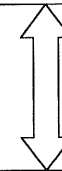
2 地域の連携

- ① 家庭廃棄物、生ゴミを捨てない、農作物を投棄しない、実収穫物を完全に除去する、取らない柿の木は伐採するなど、サルが住宅付近にでてきたら人間が恐いことを知らしめるために、必ず追い払うという地域として防除体制を確立する。
- ② 年寄りしかいない場合は、隣家が協力して追い払いを行うなど、相互協力による弱者へのバックアップ体制を確立する。

3 行政の強固な支援

- ① 防除体制を確立するための助言、指導、資金体制の支援。
- ② 里山を含めた奥山再編の総合的な見直し。

4 専任者の育成



☆ 各機関が連携できるシステムの構築

I 野生動物に関わる法律

- ①「鳥獣保護法」：「鳥獣の保護及び狩猟の適正化に関する法律」
- ②「種の保存法」：「絶滅のおそれがある野生動物の種の保存に関する法律」
- ③「外来生物法」：「特定外来生物による生態系等に関わる被害防止に関する法律」

*野生動物の捕殺活動は、「狩猟」及び「有害捕獲」でなければ出来ない。

*狩猟期間：11月15日から2月15日まで（3ヶ月）

II 野生動物とは

①定義：「人間に依存していない動物、または依存していたとしても、野生性を失っていない動物」

②人間との違い

*人間：自分のライフスタイルを変化させて、地球上どこでも暮らしていける。

*野生動物：その生息域でしか、生息し子孫を残すことができない。自分のライフスタイルを変えることはできない。

<ハクビシンの生態>

①交尾期：通年。一年中交尾している。

②出産期：年2回位。数頭（1～4匹）。繁殖力が高い。

③寿命：10年以内。

④特徴：○雑食性で何でも食べる。

○木登りもとても得意。人家の屋根や軒下など、非常に狭いスペースで自分たちの生活空間を持てる。

○繁殖力が高い。

*外来種じゃないかと言われているが、古くからいたのではとも言われており、不明。

*肉や毛皮のために戦後、日本が輸入したのではとも言われている。爆発的に増えてしまったため、手に負えなくなった飼育業者が扉を開けて、結果、一斉に散らばったと言われている。

<ニホンザル>

①交尾期：10月頃から1月上旬頃。

②出産期：4～6月ぐらいまで。180日前後で出産します。

③出生数：2、3年に1頭。2頭生まれることはほとんどない。

*福島では、年に10%程度の増加率。

④初産年齢：自然界では6、7歳。

⑤寿命：20～30年。

⑥特徴：○母系社会で、メスの母集団がいくつも集まって一つの群れを形成し、群れで行動する。

○オスは早いもので2歳ぐらいでいったん群れを離れ、自力で生活するか、11頭ぐらいのオスの集団に入って生活する。

<ツキノワグマの生態>

①交尾期：6～7月。

②出産期：越冬期の2月（冬眠中）。

③出生数：3、4年に1頭。生まれた子は、必ずもう一度お母さんと越冬する。

④出産年齢：3歳ぐらいから。5歳ぐらいになるとほとんどのクマが出産。

⑤寿命：20年前後。体重が160～170kgぐらい。

⑥妊娠期間：3ヶ月程度。

*秋の実りが良くないと着床させず、受精しても排卵してしまう着床遅延を行う。

⑦特徴：○非常に木登りが得意。

○ほとんど目が見えないので、臭覚で行動する。

<イノシシ>

①交尾期：10月から2ヶ月程度。

②出産期：春。

③出生数：年に1回。3頭から8頭ぐらい。

④寿命：7、8年。10年を超えるものはほとんどいない。

⑤特徴：○本来は昼間に行動するが、臆病なので夜間に行動する。

○ほとんど目が見えないので、鼻で匂いをかいで行動する。

○阿武隈山系に多い。

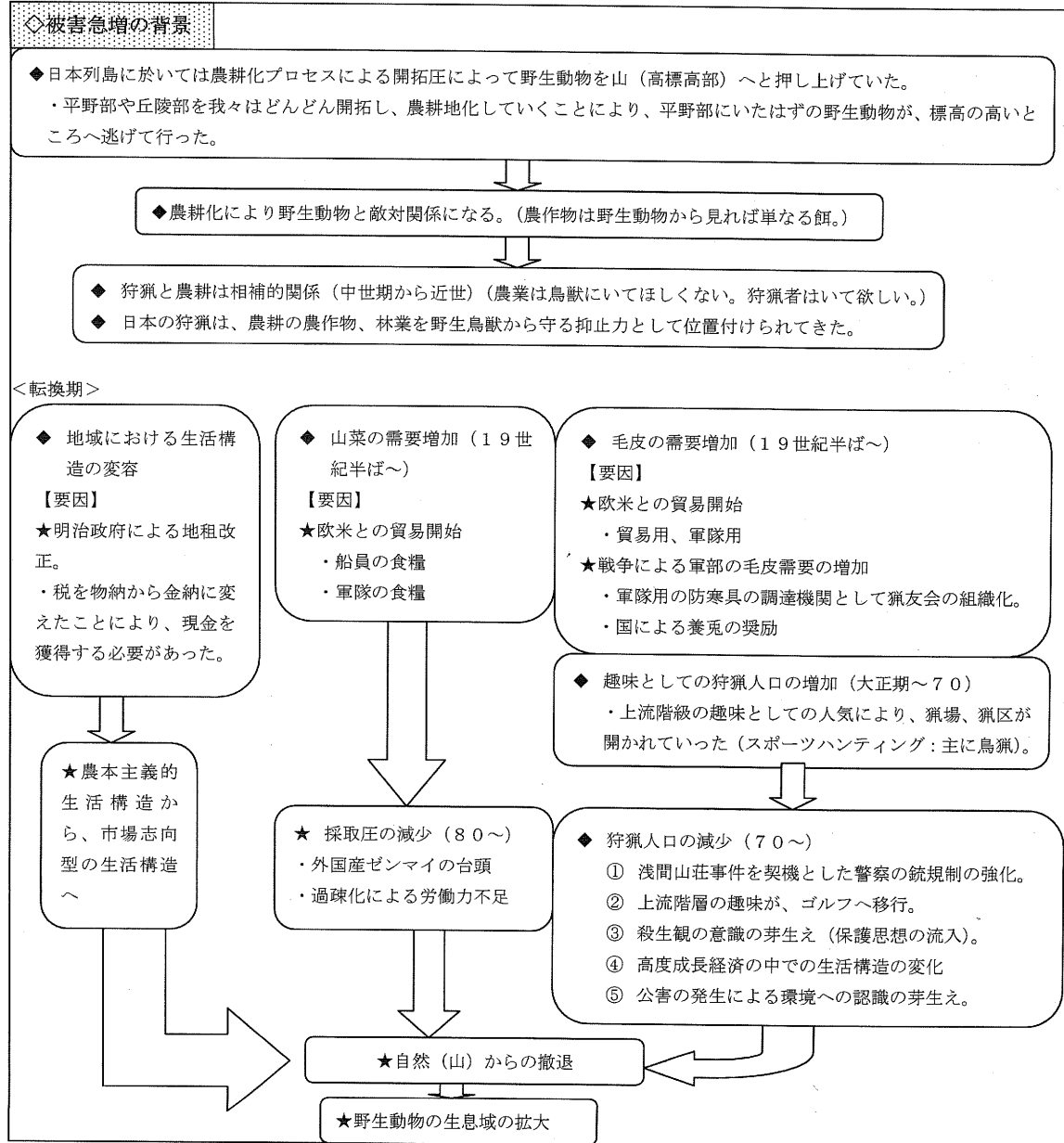
○大人の個体では、垂直に1メートルぐらいジャンプできる。

○体重は、おおきいもので150キロぐらいになる。

○糞は、ころころしたものを沢山する。

○足跡は、シカと異なり副蹄がある。

○シカやカモシカと同じ偶蹄目。



◇自然と人為的圧力のバランスの逆転

～人間が撤退していくことによって自然が攻めてくる

- 1 野生動物に対する対抗手段の放棄
 - ・ 罾の禁止、狩猟の限定、犬の放し飼いの禁止
- 2 過疎化、廃村による防衛ラインの崩壊
- 3 過疎化による耕作放棄地の増加、雑木林化

◇対策

◇問題点と視点

- 1 個体収容能力
 - ・日本の森はどのくらい野生動物を食べさせていけるのかを示さないまま、保護してきた。
- 2 地域住民の生活構造変容プロセスの解明
 - ・動物たちが変わったのではなく、人間が変わったということに自覚しないと本当の保全はできない。

◇対策

<持続性のある保安全管理と狩猟>

- 1 地域住民の民俗知を基礎とした合意可能な保安全管理策の創出
 - ・マタギという伝統的な技術を使って、野生動物が保持できて、なおかつ住民たちが容認できる地域の個体量、規模にする。
- 2 マタギ文化の再評価
 - ・春のクマ猟の推進。
- 3 猟友会の組織改編と地域個体群中心の保安全管理システムの構築
 - ・猟友会を統合し、地域個体群に合わせた猟友会のグルーピング。
- 4 犬の活用の再評価
- 5 土地利用の見直し

<課題>

- 1 駆除にあたる人たちをどうやって社会が食べさせていくか。
- 2 中山間地域の人たちがどうやって食べていくのか。

* 狩猟と駆除の違い

- ★ 狩猟：資源生に目を付けて動物を捕獲することによって、利点を得る行為。
- ★ 駆除：農作物や人身事故が起こった際に行う狩猟的な行為。

◇ 狩猟採集文化は自然と敵対しない。

- ・生活のために野生動物を持続的に捕っていくが、捕り尽くさない。自然を残す。

◇ マタギ文化

1 マタギの定義

- ・伝統的な精神世界を伝承しながら、また、伝統的な狩猟技術を保持しながら、狩猟を持続している集団や個人。

2 マタギの生業

- ・ 狩猟採集と農耕（焼き畑農業が中心）

3 マタギの精神

- ・ 自分たちの手で動物の命を奪うことによって、動物に生かされていると言う自覚を持っている。

4 罾によるクマの捕獲（1800～）

- ・ 現金獲得と駆除のために罾を行った。

5 システムチックで構造化された生活体系

- ・ 農業が始まる前後に奥山や里山に罾をかけ捕獲、駆除し、寒中に徹底的に大型獣の狩りを行っていた。

6 選別狩猟

- ・ 視認性がよい春の残雪期に実施することにより個体を確認し、個体数を維持するために、子連れメスの撃たない。

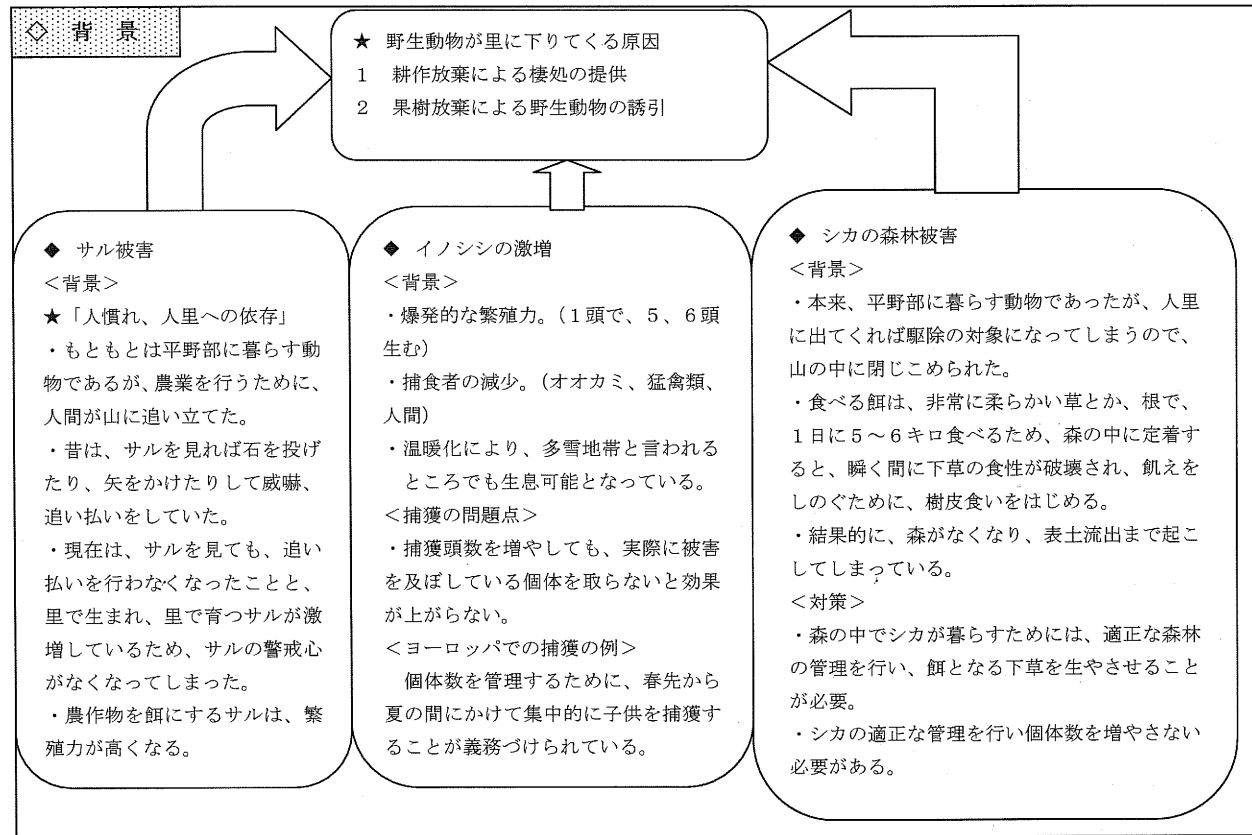
◆ 稲作中心主義の農業観が、狩猟を排除し、過剰な保護を生んだ。（近代～）

- ◆ 日本列島はじまって以来の人口のピーク時の、人間の力が強い、人間の居住圧が最もピークに達した段階の自然である。
- ◆ 人間が開き尽くしたピークの中での一番ひ弱な自然であり、野生動物が自然の側に追いやられている一番苦しい時代。

◆ これまでは、野生動物の保護が必要であった。

◆ 過剰な保護が過剰な駆除を引き起こし、人との軋轢を生んでいる。

- ・ 山には糞配というものが必要であり、森にはその森なりの器がある。器を超えて動物を保護すれば、器の中に持続性ある食物がなければ、里まで出て来る。その時は、オーバーした分だけ出てくるのではなく、全体が出て来る可能性が高い。里で捕獲される個体に雌が多かったり、高齢で体格の良い雄グマなどが混在している場合、この傾向が強いと見て良い。（マタギたちの言葉）



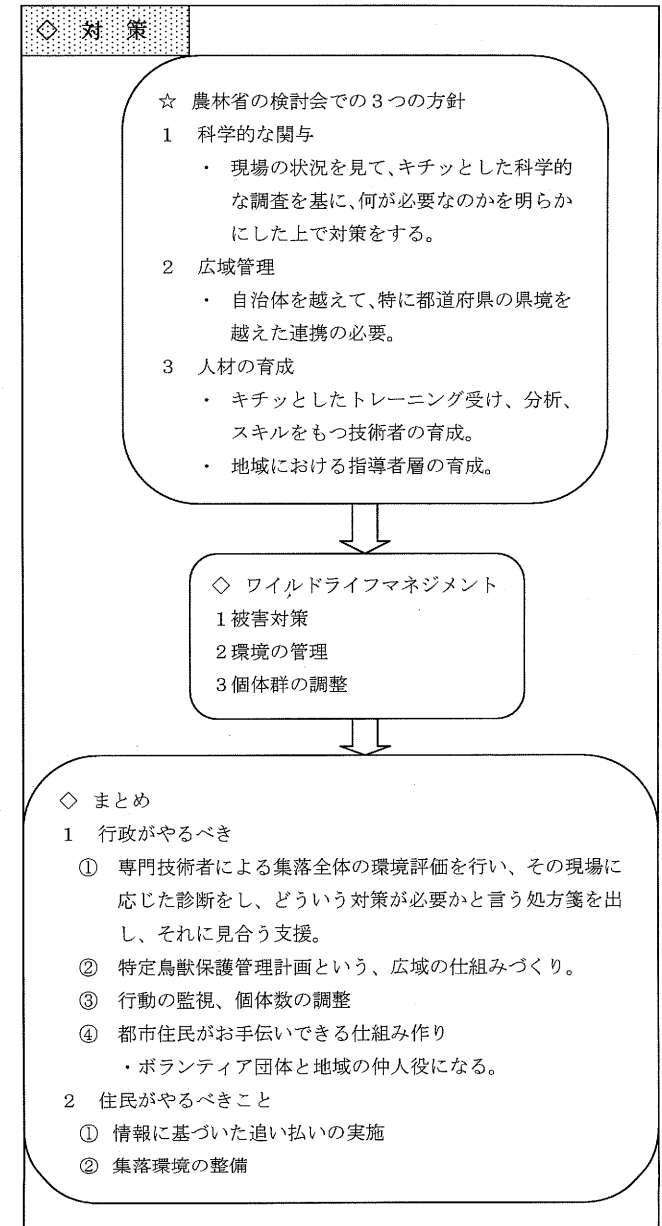
◆ 今後の問題点～アライグマの生息域の拡大 (外来生物)

<背景>

- ・ 1980年代、アニメーション「あらいぐまラスカル」の影響で、ペットブームが起り、大量に輸入された。
- ・凶暴化と大型化により、家庭では飼育不可能となり、逃げ出したり、捨てられたりということが全国で起こった。
- ・現在、47都道府県に広がっていると考えられる。

<問題点と対策>

- ・捕獲者の方で知識がないため、ハクビシンと間違えられるケースもあり、正確な情報が不明。
- ・正確な情報を得るための監視体制が必要であり、見つけ次第捕獲する必要がある。



<失敗事例>

★ サル対策の失敗例

【神奈川県】

◆箱根におけるサルの楽園化計画（1986年～10年）

・山の山頂近く、2300haに5万本の実のなる木を植えた。（2億円）

<結果>

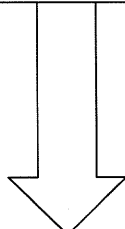
・全ての群れが海岸線まで降りてしまった。一部は、完全に市街地に定着してしまった。

<原因>

サルは人間に一番近い動物なので、我々人間が美味しいと思うものが美味しいし、我々人間が暮らし安ところに暮らししたがらる。

【千葉県】

・むやみな駆除により、群れが分裂し、被害が2倍になった。



★ サルを増やさないための基本的な考え方

- 1 農地へ依存させない。
- 2 群れを分裂させない。
- 3 個体数を増やさない

<成功事例>

◇ 人と野生動物の棲み分けの事例

1 長野県（人と野生動物の棲み分け事業）

- ・ メンテナンスをすることを前提に県が補助を出し、緩衝帯づくりを実施。

◇ サルの行動制御の成功例

1 神奈川県丹沢の例

- ・ 発信器を付けて行動を監視し、サル予報を出している。

2 神奈川県小田原市の例

- ・ 狩猟免許をもった専従の職員2名により常に追跡を行い、住宅地域に侵入した場合、花火弾を使い、痛みを与える。

3 東京都檜原村

- ・ 東京都の事業で、電気柵を設置。

4 東京都奥多摩町

- ・ 福祉政策の一環（寝たきり防止対策）として、農地全部に暴風ネットを設置。

◇ 神奈川県のシカ管理

①管理ユニット方式の採用

- ・ 丹沢地域を55の管理ユニットに分け、各ユニットごとに管理目標を設定する。
- ・ ボランティアを使い、植生の劣化状況を調査し、どこを優先的に捕獲すべきかを地図上に落とし戦略を練る。

②水環境保全税を活用

- ・ 鹿被害対策のために森林を管理すすめるのではなく、県民の飲み水を確保するために森林を適正に管理し、結果的に鹿の被害を減らすということを、来年度から実施予定。

★ 野生動物と先人たちの知恵

1 追い払いの実施

- ・ 子供たちが1日中田んぼの中で手を叩いて歌を歌う。
- ・ 山裾に番小屋を作って、1晩中火を焚く。

2 猪垣の設置（集落全体で実施）

- ・ 伊那市、琵琶湖では、集落、農地全て石垣で囲んでいた。
- ・ 沖縄県ヤンバルでは、集落全体を石垣で囲んでいた。各家ごとに保守管理が義務づけられていた。

◆背景

◇クマの畑を始めた理由

- 有害駆除による捕殺数の増加
・殺されるクマのほとんどが、有害駆除。
- 有害駆除への不信
・有害駆除は、本来行政措置ではないか？
【現状】
・有害駆除を獲物として見るハンターたち。
・被害が極小でも被害申請を促して、捕りたがる。
【理由】
・クマは金になる。(肉、胃、毛皮、脂)
- 槍で殺されるクマを何とかできないか。
・7年前までは、宮城県は苦痛を伴うやり方(槍)でクマを殺していた。
- イノシシの進出によって誤ってクマが多く捕獲されている。

◇有害駆除の原因
→農作物被害で、ほとんどが夏場。
【理由】
・夏場に、餌がない。

★クマが餌を求めて、里に下りて、農作物被害を起こす。

有害駆除による捕獲頭数を減らしたい。

◆クマの畑づくり

◇クマの畑を作って、クマが駆除されないよう誘導

★蔵王山麓に、農家と同じ農作物(デントコーン)畑を、作付けの時期をずらしながら3箇所を作る。

★面積：2ヘクタール

★管理：整地、堆肥入れ、耕耘、種まき、除草剤散布、防鳥ネットハリ。

★経費：約20万
<内訳>

- ・コーン種代：20Kg、3万
- ・除草剤代：5リットル、2万
- ・テグス代：1000円
- ・借地料代：約14、5万

◇2005年の調査結果

★クマの畑へ、クマはやってきた。
・七夕から秋の彼岸頃までの間、集中してやってきたので、この夏の1か月何とかすれば、クマは山から人里に下りてくる必要はないということが大体分かった。

★周辺の被害状況
・近くの畑にも被害があった。(居着いたクマか、別のクマかは分からないので、発信器を付けて調査する必要がある。)
・周辺人家があったり、山側から離れて道路で隔てられていたり見通しの良い畑は被害がなかった。クマは、森とか川からやってくるのが分かった。
・電気柵で囲まれた畑は、被害がなかった。

【結論】
・クマの畑単体では、ちょっと効果が薄かったのではないかと。
・電気柵による効果は認められる。

今後の活動

1 クマの畑作り

◇クマの畑づくりの今後の方向性

- 1 個人防除
・収穫を目的とする畑の周りに、クマの畑という防波堤を築く。
・お金の余裕がある場合、電気柵をやる。
- 2 地域防除
・収穫を目的とする畑の周りを、クマの畑でぐるっと囲む。
<問題点>
・クマの出没状況を調査する必要がある。

2 クマの森づくり

◇行政への提言
ワイルドライフマネジメントの必要

- 1 情報収集体制に確立
・情報を集められるシステムを確立し、住民へ還元していく。
- 2 市民グループ、ボランティアのバックアップ
・調査にかかる保険、機材、拠点の支援。
→市民も行政との共同事業であるとの認識を持ち、活力がでる。

第4回 野生動物との共生に関する研究会 概要版

「クマの畑」を作りました

講師：ツキノワグマと棲処の森を守る会 代表 板垣 悟 氏 調査委員 高橋 千尋 氏

◇ クマの生態

★ 食べ物：何でも食べる。

- ・ 春の新芽、秋の栗、ドングリ、ブナのみ。カボチャ、メロン、焼き魚、焼き鳥、天ぷら、etc
- ・ カボチャ、メロンは、真ん中の美味しいところだけ食べる。
- ・ 樹皮食いをを行い、森林被害も起こす。(あれば、全ての木に被害を及ぼす。)

★ 嗜好物・

- ・ 蜂蜜。養蜂家の蜂蜜を襲う。蜂蜜の匂いに釣られ、檻で捕獲されてしまうケースが多い。
- ・ 揮発性の強いペンキ、コールタールの匂い。新しい看板、テーブルなど好きで、戯れて壊してしまう。

★ 木登りをすることが出来る。(クマ棚を作る。)

- * 栗被害では、木の根本にトタンを巻いて対策を行い、成功した。
- * クマに追いかけられて、木の上に逃げても無駄である。

★ 走ることが出来る。(敏捷性が高い)

★ 泳ぐことが出来る。

★ 糞は人間と似ている。(山の中で、そばにちり紙がなければクマの糞。)

★ デントコーン畑の食べ方は、周辺部からではなく、真ん中から食べる。

★ 秋の実り(ドングリ、栗、ブナの実)が少ないと、クマは子供を生まない。

◇ 野生動物が人慣れを起こす原因

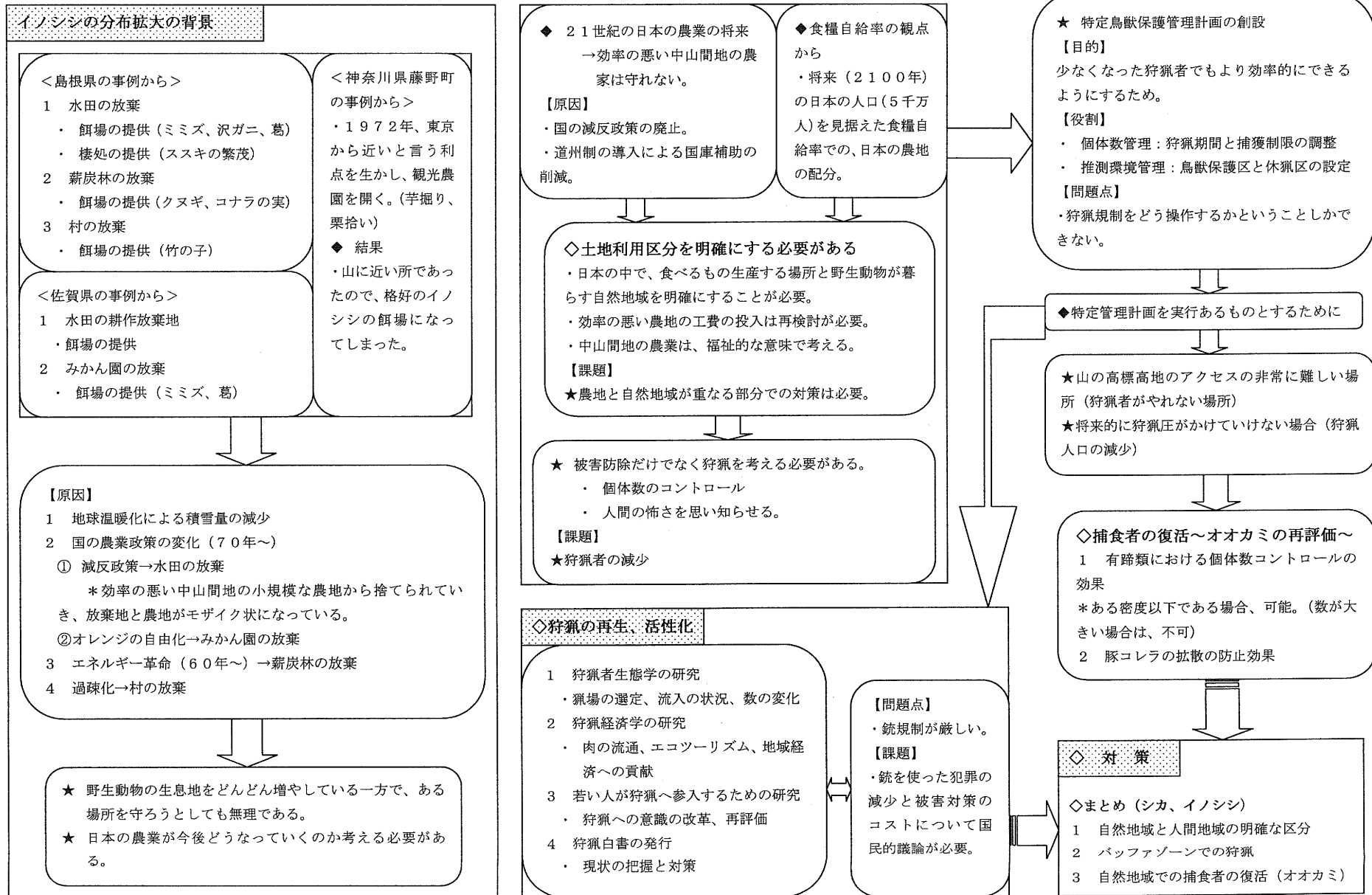
- ・ 林道開発により、簡単に山へ人を連れてきてしまう。

◇ 被害防除が進まない原因

- ・ 被害防除が効果があるのは、皆分かっているが、お金をかけるだけの収入があるかどうか。
- ・ 高齢により、メンテナンスができない。

◇ 人身被害を少なくする工夫

- ・ 看板設置による注意喚起



☆ 野生動物保護の考え方

- 1 アニメ、漫画の間違ったメッセージの流布によって、
 - ・ 人間を取り囲む環境を、森林が人間のために浄化し手暮れると考えるのは思い上がり。(アニメ「風の谷のナウシカ」)
 - ・ 野生動物と人間は心を通わせることは出来ない。(アニメ「風の谷のナウシカ」、漫画「ワイルドライフ」)
- 2 地球は種の絶滅の歴史である。
 - ・ 種にも寿命があり、それが尽きれば別の種に置き換わる。
- 3 野生動物保護の目的は、我々人類と、人類が作り上げてきた文明を守るためである。
- 4 野生動物と人間は闘争的共存である。
 - ・ 「野生動物との共存というのは、仲良く手を取り合っただけの共存ではない。闘争的な共存なんだ。我々この日本で分かり合えることは出来ないけれども、彼らを絶滅させることでもいけない。でも、その中ではお互いの生息地、生息環境というのがあって、そこで生き延びていくためには、場合によっては、闘わなければならないんだ。だから闘争的共存なんだ。」(北海道大学鈴木さん)
- 5 環境科学の重要性、注目度が上がることによる怖さ。
 - ・ 何か危機感を煽るようなものがあると、ダイオキシン問題、環境ホルモン問題のように、一気にそこに集中してしまうという危うい場合も出てきている。
- 6 我々は、守るべきものがある。譲れないものがあるので、その間でどこで線引きするかということを考える必要がある。

◆ 効率的な農業の事例～八郎潟村

- 規模：水田、畑 15ha / 戸
- 収入：3,000万円 / 戸
- 後継者：いない農家1戸だけ
- 結婚：ほとんどの人が結婚
- 自分たちの所に誇りを持っている。

◆ 中山間地の農業

- 規模：平均 0.6～0.7ha / 戸
- 収入(水田)：平均 10万～30万円 / 戸
- * 防除対策にかかるコストがでない。
- * 農業ができる理由：年金

★フランスにおけるイノシシ猟

- ・ 周辺農家へ被害を出さないように、猟区をフェンスで囲って管理。被害があれば、補償を行っている
- ・ お金持ちの趣味として集まってくるので、地域へかなりのお金を落とす。

若者の狩猟への意識改革

◆北海道西興部村

- エゾシカを地域の自然資源と位置付ける。
- 狩猟により個体数を管理し、農林被害を防ぐ。
- ガイド付きの狩猟によって安全な狩猟の実現。
- 入猟者の宿泊、飲食や地元ガイド雇用による地域経済への貢献。
- 狩猟技術を蓄積し、初心者ハンターの教育を行う。

◆ 学生の狩猟実習

- ・ 狩猟学の講義、解体実習、料理実習、懇親会、シンポジウム

<結果>

- ・ 若い人実際に体験させることで、意識を変えることが出来た。
→ 2名が狩猟免許を取った。

【重要なこと】

- ◎自分で触ってみること、そこにいる狩猟者の人と話をしてみること、狩猟の意義というものを説明者がちゃんと説明してくれる場所があれば、若い人でも理解する。

特定計画の成功例

◆ 栃木県の特定計画の評価

【要因】

- ・ 被害の発生地域が日光足尾ということで、比較的東京からアクセスの良い場所だったため、首都圏の狩猟者を入れることが出来たので、高い狩猟圧をかけることができた。
- ・ 昔から研究者がいてある程度分かっていた。

【問題点】

- ・ 今後、分布が拡大した場合、他の地域にも県外ハンターが入ってくれるかどうか分からない。

◆ 島根県の特定計画の評価

【要因】

- ・ 狩猟者がどんどん減る中で、農家に補助金を出さず、試験回数を増やし、罾猟のハンターを増やした。

【問題点】

- ・ 銃猟は犬を使うので、罾がそこらじゅうに仕掛けられると、その高い犬を捕ってしまうということで、罾猟と銃猟の共存は難しい。
- ・ 農家が罾猟を始めても地域の猟友会に入らないので、狩猟技術が後世に引き継がれていかない。

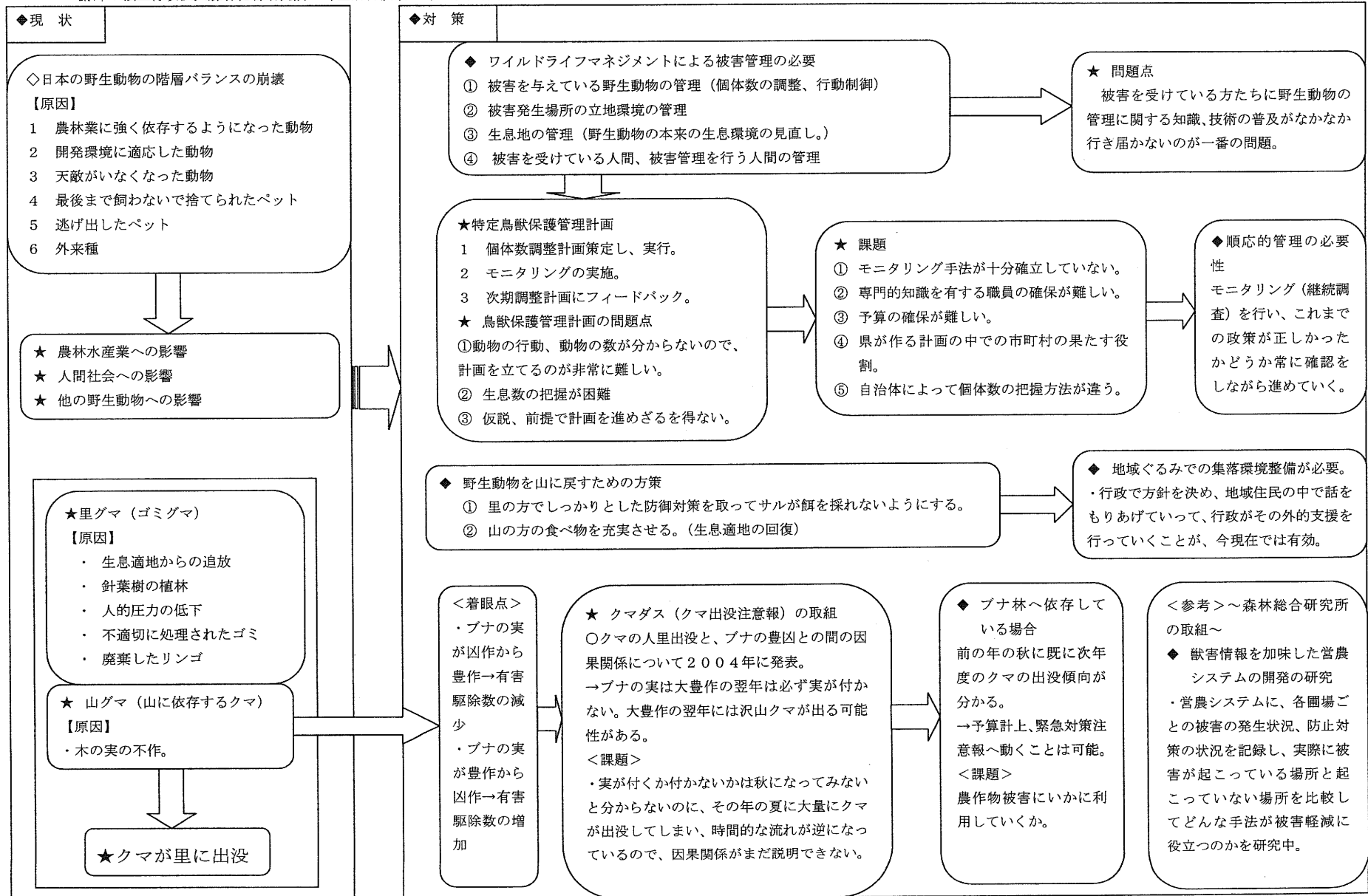
◆ 北海道の特定計画の評価

【要因】

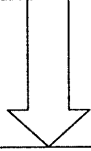
- ・ 道東ではシカの被害を減らせたが、他方で数千キロという柵で、森林を囲ったということもあり、被害を減らせたが、これが特定計画で捕獲数を増やした成果かどうか不明？

【問題点】

- ・ 今、西部の方でシカが増えてきている。



★なぜ自然を大切にしなければなぜ自然を大切にしなければならないか？



★自然の恵み（生物資源、生態系サービス、快適さ）を私たち自身、人間のために、私たちの子孫に残す必要がある。

<自然の恵み>

1 生物資源

- ・ 燃料としての炭、採油、果物、薬、狩猟としての肉（タンパク質）、藤、毛皮、薬用植物、魚介類。
- 現在、無価値だと思われる生物でも、いずれ薬など、活用の可能性がある。

<クマの生理機能の可能性>

冬眠中のクマは何も食べなくても済む生理機能が備わっているので、これを研究し、寝たきりの人や骨粗鬆症に悩む人に役立つ薬の開発に活用できないか。

2 生態系サービス

- ・ 植物の持つ洪水や干ばつに対する緩衝作用。
- ・ 気候を調整する作用。
- ・ 廃棄物をきれいにしてくれる作用。

3 快適さ

- ・ 自然を見て感じる心の安らぎ。
- ・ レクリエーション。

エコツーリズム

★ クマの生態

◇分類：食肉目クマ科

◇歯型：裂肉歯が後退し臼歯形

◇食性：・雑食性（虫、蟻を食べる。）

・非常に食物に対して食欲。→食べ物が目の前にあったら銃をもっている人間は気にならない。

・春：草本類の柔組織（山菜）

・6月頃：木イチゴ、山桜の実、ミズキ

・夏：探索型（いろんな所を探しながら実のなっているのを次々に取っ替え引っ替え食べる。）

・秋：飽食型（コナラ、ミズナラなどの実がたくさん落ちている所でか食いをする。）

◇消化器官：腸の長さは体長の5、6倍の長さしかなく、草食動物に比べ非常に短い。

→体が肉食であるにも関わらず植物を食べるので、沢山たべなくちゃ生きていけない。

◇冬ごもり：食べ物が無い時期に寝てしまうので、冬を難く過ごすことが出来る。

◇出 産：1、2月に出産する。（体重200～300g）

→子供に乳を与えるために、秋のうちに食物を十分に確保して自分のエネルギーを蓄えておく必要がある。

◇妊 娠：着床遅延を行う。受精しても、10月、11月に十分な栄養を確保できて初めて子宮に着床する。

◇行動圏：100～400平方km

◆クマダスの取組事例

★ 岩手県での取組（200年～）

- ① 目的：人身被害の回避
- ② プナの豊凶の調査：
 - ・東北管理局のデータ、
 - ・独自の公共調査
- ③ 発表：クマが冬眠中の3月20日に発表。
- ④ 留意事項
 - ・間違えないようにする。
 - ・大量出沒になりそうなきだけに限って発表する。
 - ・出沒しないという予報は出さない。
 - ・違ったらきちんと訂正する。
- ⑤ 周知方法：メディア、森林組合関係、市町村を通じ周知。
- ⑥ 効果：人里での人身被害について減った。

◆ 岩手県でのクマダスの評価

・岩手県でのクマの管理：2つのユニット（奥羽山系の個体群、北上側の個体群）で管理しているが、北上側では、プナの豊凶と関連性がないが、県全体で発表した。「特に、奥羽山系では」と言う書き方をした。



<北上側での課題>

- ・里グマ（ゴミグマ）の問題を解決していく必要がある。つまり、生息適地を回復させる必要がある。
- ・獣害に強い集落づくりを図る必要がある。



◆ クマダスの全国的な取組

秋田県、石川県、富山県、長野県、岩手県

<課題>

◆ 裏付けを持っていないので、5、6年データをとって何が原因なのか、クマの出沒と何が関わってクマダスの全国的な取組

秋田県、石川県、富山県、長野県、岩手県

<課題>

- ・裏付けを持っていないので、5、6年データをとって何が原因なのか、クマの出沒と何が関わっているのか、大量出沒を説明する要因はその地域にとって何なのかを調べていく必要がある。
- ・やり方が各自治体でバラバラなので、全国で統一する必要がある。